

平成30年9月1日発行 春燈/第73巻第9号(毎月1回1日発行) 昭和21年7月22日第3種郵便物認可

春燈

2018 September

9
月号



主宰の句

安立公彦

夏の蝶灯台高く舞ひ上がる

詩一篇詠むかに仰ぐ朝の虹

三十年の光陰おもし敦の忌

ひとすぢの瀬音に憩ふ夏野かな

サンガラス男にもある孤愁や



安住敦の句

年寒し死なれて困る人に死なれ

『歴日抄』昭和四十年

「十二月十七日三隅二子さん逝く」の前書。約一月前万太郎はご自分の死後、著作権一切を母校慶応義塾へ贈与する意志を表明。同時に、法の庇護を受けられない人の上をよろしく頼みたいと言われたという。ところが翌月、万太郎が杖とも柱ともたのむその人を失うのである。「死なれて困る人に死なれた」師を、どうお慰めしたら良いのか。敦先生の優しい戸惑いが伝わって来る。

青柳雅子



安住敦の句

秋草のどれも頸長夢二の忌

『歴日抄』昭和四十年

敦先生は「春燈」を五十六歳で継承されて、何かと多忙にいられた。とある日、野辺の秋草を手折られて、ふと思われたのであろうか。秋草はひよろひよろと細長く頼り無げで納まりの悪いもの、竹久夢二の描く瞳の大きな美人画へと思いを馳せてみた。その竹久夢二は、昭和九年九月一日、長野県富士見高原療養所で、孤独な死を遂げた。享年五十歳とある。

溝越教子

燈下集



○ はつ夏の天空均す鳶の輪

老頭児の身を解しゆく新樹光

夏帽子メタセコイアを仰ぎけり

飛石の歩幅大きく夏落葉

地縁血縁薄れ行く里枇杷熟るる

○ 後藤眞由美

水無月や青き灯こぼす観覧車

時の日の湾に広がる汽笛かな

荒梅雨や蛇籠越えゆく水しぶき

十穀米十六穀米芒種かな

独歩忌や風に梢鳴る大櫛

○ 川崎真樹子

白靴の尖り新宿歌舞伎町

聞き役やレモンスカッシュ酸っぱすぎ

雷鳴や神の椅子蹴る音かとも

修道女の美しき沈黙レース編む

約束をすつぽかされたる蛍かな

○ 豊谷ゆき江

親子喧嘩の水掛け論やかき水

マスターの今日も不機嫌水中花

入院同意書親子のサイン日雷

住吉水門上げ潮時や夏燕 (佃島行句)

下町に残るやさしさ釣忍

○ 木村 梨花

吹きこぼすミルクの膜や朝ぐもり

水玉を着て噴水を喜ばず

山開き窓いつばいの朝の富士

三伏や一子相伝陀羅尼助

結局は水掛け論やビール干す

○ 溝 越 教 子

時計草絡まる度に刻止める

木下闇秘密のひとつ埋めけり

梅雨晴間俄にふゆる一仕事

父の日の父似の性を懐かしむ

ほうたるや月命日は逢瀬の日

○ 齋 藤 晴 夫

時計草手管つくすも誰も見ず

盆の窪夏至もさむしと嘆きつる

十薬のひそかに咲きて急ぎをり

白牡丹人たち映えて佇めり

螢火の明滅に見る命とは

○ 坂 入 妙 香

空高く泰山木の咲きにけり

一の橋二の橋町の緑濃し

コンビニまで傘借りて行く梅雨入かな

名水の豆腐の味や青簾

いつまでも母の思ひ出更衣

○ 河 崎 國 代

過ぐる風背にこそばゆきむぎのあき

思ひがけぬ医師の言葉や半夏生

なか空に山法師留め暮れがたし

夕菅の月光透かせ岬に消ゆ

野球場の歓声著く梅雨あがる

○ 上 野 進

老鷲にからかはれては歩を正す

いみじくも螢の呼吸色に出て

薔薇挿して男の書架に緋を点す

もののかも今は昼寝か木下闇

水筒の重み増したる岩清水

○ 石橋 邦子

拭き掃除から始まるひと日半夏生

白南風のひねもす吹く日敦の忌

虹立つや棚田へこぼす山の水

雅楽流るる九段の森や早梅雨

文月や三門暗き増上寺

○ 河本由紀子

今日も玉子二つ割る音梅雨入かな

若き日のケルンに積みし石の数

来し方行く末思ひおもうて明易し

大の字の昼寝畳にかぎりけり

箍でもつ十五代目や風青し

○ 永井 恵子

母の亡き嫁より届くカーネーション

植田見し夜の昂りや農の血我

すぐ先の落下も知らず水馬

夏霧の深きに我が身包まるる

青梅の濃き彩りを恐れけり

○ 荒井ハルエ

病む人の小さき顔きみどりの夜

ハンカチーフ差出され拭く涙かな

喪の家や鴨居に遺る夏帽子

立葵ゆるる窓辺や七七忌

ソーダ水お墓の話などもして

○ 石田 康明

繰り出すや梅雨を厭はぬ異邦人

父の日や厳父と見えて涙脆

つりがね草ひらきて零す涙の詩

梅雨明を待たず漢の杖を曳く

シャンシャンの育つは早しハンモック

○ 宮 崎 洋

六月や夕べの色のシャンパンを (横濱吾何)

ジャズの夜のみどりの雨のとぎれなく

引き合うて揺れぬる薔薇の二輪かな

噴水やなみだの頬のかわくまで

涼風やハマの明治はとほからず

余言

安立公彦

六法全書の手擦れのあとや父の日来 鷹崎由未子

この「六法全書」は、在りし日の父君が折に触れては読んでいた書籍。この父君は高名な祖父を継ぐ有力な政治家で、その書齋は今も尚父在りし日の跡を止めているのだ。今日は六月第三日曜の「父の日」。母の日に比べ印象はうすいが筋は通っている。作者は今、その父の曾ての書齋に入り、机上の六法全書を手にする。開くどのページにも父の読んだ手擦れの跡が残っている。「父の日」を詠んだ数多の例句の中でも、殊に趣の深い句と言えよう。

余り苗夕日あつめてゐたりけり 鈴木 直充

「余り苗」は、苗代から本田に移し植えた早苗の余った苗である。そう言えば、昔日の田の隅に、そういう苗が片寄せてあるのを見た遠い日の記憶が甦つて来る。この余り苗は、あちこちの本田の補足となるのだ。

作者は今、そういう「余り苗」を目前にしている。広び

るとした植田の片隅に残る一叢の余り苗に、夕日が赤く差している景は、平穏な安らぎを見せる。中七下五の表現により、「余り苗」の季語が存在感を深めている。

新刊の本の空色風薫る 岩永はるみ

六月本部句会の、特選十句に選出した作品。その鑑賞に「本の空色が季節感を表している」と書いたが、正にその通り。書籍の新刊の手触りの良さは、もとよりその本に書かれている内容への愛着の感覚から来ている。これは多くの愛書家の思いと言えよう。

今、作者は一冊の新刊書を手をしている。カバーの空色が、「風薫る」初夏の涼味を感じさせる。同時に「本の空色」が、作者の思いにも及ぶ句と言えよう。

登高す人生己に下り坂 呂 秀文

「登高」は、中国の行事から来た季語。今は、「高きに登る」の言葉の示す通り、秋の日、自然に親しむために山野に登ることを指す。秋の季語である。

この句、「人生己に下り坂」が劇的だ。人生において、下り坂をどう判断するかは、全てその人の個性に依る。今

作者は「下り坂」と断じているが、語意から考えると「下り坂」こそ人世の真骨頂を示す時期と言えよう。五木寛之の『下山の思想』を思い出す作品だ。

初夏の路地に潮の香通ひけり 宮沢 治子

この句、去る五月二十七日の、神奈川支部大会での作。その際は、上五が「夏近き」だったが、それが「初夏の」と推敲されて、「路地」が生きて来た。「夏近き」では、対象が離れ過ぎていた。適切な推敲と言えよう。

細長い大磯の町は、歴史上の名勝も、また民家も等しく相模湾の潮風を受ける。「路地に潮の香通ひけり」は、それを良く表現している。更にそれらを受けて、「初夏の」が一句をこの地にふさわしくまとめている句だ。

古書店の軒先暗き梅雨の月 赤羽 陽子

この句も六月本部句会で特選に頂いた十句の一つ。その時の句会報にはこう記した。「この古書店は、街中にひっそりとする店と思われる。探していた本が見つからず店を出て来た作者。小暗い軒先に、梅雨の月がぼんやりと映っている。此事をみごと一句にまとめている。」

作者の行動は、かねて私たちが書店に入り込んでいる姿である。句会報にも書いた通り、此事である。しかし、俳句のこころは、こういう日常の此事の中にこそ在る。

地縁血縁薄れ行く里枇杷熟る 赤岡 茂子

参考までに、地縁、血縁を再録してみよう。「地縁」は自分が今住んでいる土地の人びととのつながり、「血縁」は血すじをひく親族。その繋がりには何れも離れたい絆があるが、その反面、歳月とともに、死別、疎遠という現実が生まれるのも、また事実である。

作者はいま、高枝に色付く枇杷の実を仰ぎながら、その古里を思い、同時に過ぎ来し日々の朋友を思い出している。地縁、血縁にも、とわの別れはあるのだという思いは、寂しいが、その思いを、ふり仰ぐ黄熟した枇杷に託す作者。私たちは、そこに作者の悟りの境地を思うのだ。

植田見し夜の昂りや農の血我 永井 恵子

「田」は私達の生活に最も深く結びついている。田植が終わると代田は植田となり、やがて青田に至る。稲刈を終えた刈田は櫛田となり秋も深まる。その田から生れた米は世界有数の食糧穀物だ。私達はその恩恵を深く受けている。作者の住まいは南九州都城。北に天孫降臨伝説の高千穂峰を望む。そういう背景の地で、先祖は農業を営んで来たのだ。その血筋は固い。「夜の昂りや農の血我」に、私たちは改めて「農」を見直す思いのする作品である。

当月集

安立 公彦選



○ 川崎雅子

独り寝の耳にかなしき不如帰
浦里の夏は大雨誘ひ来し
梅雨出水一村すべて崩し去る
不如帰藍花の浪子を思ひけり
故郷をへだてて遠し霧の海

○ 茂木なつ

みどり児あやす翁の笑みや梅雨の月

吾を産みし亡母を偲ぶや七月四日

病苦より逃れし一年梅雨の月

植糸終へし田の面を渉る今日の月

青しだれの一枝担ぎ行く七夕竹

○ 佐藤玲子

早苗饗を終へて上京する話

ふるさとへ続く上野の青葉かな

夏木立棟上げ餅の土産かな

万緑の上野の山で解散す (故郷会解散句)

再会を約する皺の手青葉風

○ 持田信子

雨戸引く音に寄り来る緋鯉かな

朝ぐもり履いて馴染ます布ざうり

真一文字に声の飛び交ふ鮎の糶

荒梅雨や坂東一の仁王像

牛蛙さみしくなれば鳴きにけり

○ 平沢恵子

走り梅雨腓返りに目覚めけり

更衣久に会ふときつつましく

六月や浄土の池に鯉の腹 (祿名寺)

空青く太宰の墓碑にさくらんぼ

雨蛙清く正しく葉のうへに

春燈の句

安立 公彦選

手のひらに淡き水の香蛩狩

東京 佐保まさを

袖垣を打つ雨しづく濃紫陽花

阿弥陀堂つと香水のよぎりけり

あさざ咲くや日のてらてらと用水池

嫺やかに庭を廻るや梅雨の蝶

大阪 中上 馥子

間の抜くる鴉の声や明易き

近況など彼岸へ届けアマリリス

時の日や四分遅れの腕時計

武者幟はためく谷や晴れわたる

鳥根 土江 比露

溪流に小魚のかげ青あらし

遮断機の長き点滅街薄暑

川の辺に反古焼く煙夕薄暑

篋に蛩来てゐるつるべ井戸

母の忌の近し柚の花香りけり

埼玉 中里よし子

朝々の賑はひ燕巢立つまで

再会なき別れと知るや青葉木菟

海酸漿鳴らしし頃は大家族

兵士らに水接待のむかしあり

ソーダ水昭和もやがて遠くなり

小田原から京へ越す姉夏の海

特急会津武蔵野を往く麦の秋

被災地にカサブランカの咲き乱る

金雀枝に能く能く見惚る旅インカ

万緑や峽に凜たる庁舎ビル

浅草の句碑に慈悲なきをとこ梅雨

百日紅映ゆる門前そば処

梅雨明けて吹くハーモニカ鳥も鳴き

スポーツもニュースの主役夏の月

神奈川 犬嶋テル子

福島 室井津与志

東京 鈴木としお

